

ジョウロウスゲの生育環境について

吉田 三夫*

On the growth environment of *Carex Capiriconis* Meinsk. ex Maxim.

Mituo YOSHIDA

I はじめに

ジョウロウスゲはカヤツリグサ科スゲ属の植物で、水湿地や水辺砂質などに生育し、北村(1969)は、関東地方では稀産としている。

このジョウロウスゲが2001年6月1日に川崎市多摩区登戸に接する多摩川の川原で発見された。神奈川県では1907年6月1日に海老名市で発見されて以来であるので、約100年振りの再発見ということになる。発見者は川崎市在住の神奈川県植物誌調査会員・平川恵美子氏である。

そこで、ジョウロウスゲが生育していた川原の環境を記録に残すことにした。



ジョウロウスゲ



川原の風景

河川関係者の話によると、この溝の水は多摩川の水と連動していて、多摩川の水位が高くなれば溝の水位も高くなり、多摩川の水位が低くなれば溝の水位も低くなるということある。



中水位時の溝の水位の様子

II ジョウロウスゲの生育環境

川崎市が接する多摩川の川原の大半はグラウンドになったり、ジャリなどが敷かれて半自然的な状態になっている。ここの川原の水際は人の手が加わって大きな石などが置かれているが、川原そのものは人の手が入っておらず、自然の状態で残されている。貴重な川原といえるが、いつまでもこの状態で残るとは限らない。

この川原には幾つかの溝があって、そこは湿地になっている。

溝には泥がたまっているが、溝でなく溝より高く平地になっている所は砂と礫(レキ)になっている。この川原には幾つかの溝があり、これらの溝の最も堤防よりの溝の際の砂地に、ジョウロウスゲは生育していた。生育地から少し離れると砂礫地になってしまう環境である。

上流から種子が流れてきて本川原にジョウロウスゲが生育したものだろうが、多摩市又は稲城市の川原でも本種が発見されたということを知り植物関係者から聞いた。

2002年5月にジョウロウスゲの生育環境を調べたが、この時、この溝の中にはヤナギタデが高被度で生育し、カワジシャ、オオカワジシャ等が見られ、溝の際には本種やカズノコグサ、キショウブ、スカシタゴボウ等が生え、砂礫地にはオキジムシロ、ネズミムギ等が生育して

*川崎市青少年科学館

いた。

文 献

図1に川原のおおまかな断面図とジョウロウスゲが生育していた溝の断面図を示したので、参照されたい。

神奈川県植物誌調査会編 神奈川県植物誌 2002
神奈川県立生命の星・地球博物館
北村 四郎(1969) 原色日本植物図鑑 [下] 保育社

図1

川原の断面とジョウロウスゲの生育断面図

